２０２３年度（第２０期）事業報告

（2023 年 4 月 1 日から 2024 年 3 月 31 日まで）

特定非営利活動法人アーシャ＝アジアの農民と歩む会
プロジェクト統括責任者 三浦 照男

はじめに

新型コロナ感染拡大の脅威も収束し、インド事業地では、昨年度から継続してきた各種事業の経済的自立方針の強化により、有機農業組合への支援、農村女性のための縫製事業は大過なく実施できた。同時に、これらの自立的な活動はマキノスクールが実施する農村住民のための研修、ワークショップ、及びマキノスクールの主軸でもある持続可能な農業・農村開発研修コースの実践的、実用的な研修に大いに貢献した。

2022 年 3 月 JICA に採択された大豆関連事業を開始すべく体制を整えていたが、インド政府からの承認が未だ得られず、実施に至っていない。

このような状況において、3 年間休止していた持続可能な農業・農村開発研修コース（9 か月）と、日本人学生向けインターンシップ・プログラム、スタディツアーを再開できたことは、インドの事業に希望を与えてくれた。支援者、協力者の皆様に心より感謝している。

Ⅰ．特定非営利活動に係る事業

１．農業・農村開発事業

持続可能な農業・農村開発・収入向上事業

１－１貧困農民のための収入向上活動事業

- アラハバード有機農業組合（AOAC）の運営、普及、販売開拓の支援、協力を行った。新型コロナ感染が収束し、一時帰国していた日本人帰印者も増え、組合の和食調味料及び日本米の販売も増加している。今年度は特に、直接販売、そして農家のグループ有機認証獲得のための支援および助言活動を行った。また大都市の食料流通業者とのネットワークを強化し、良質な食料の安定供給と安定需要実現のための助言活動、日本米栽培農家のためのセミナーを実施し技術提供を行った。

AOAC 栽培農家のためのセミナー

- 収入向上と住民の栄養改善事業はアラハバード有機農業組合事業の一部門とし、日本でのモリンガ販売促進、インドにおいてはモリンガと豆腐の販売促進を行った。また、農村住民の栄養改善のためのモリンガ粉配布と豆腐普及のための啓発活動を行った。

- また、より良質で安全なモリンガ加工品製造のための支援、技術指導を行った結果、インドおよび日本での食品衛生試験で常によい結果を出せるようになった。

モリンガ加工をする
AOAC 農村女性たち

2．人材育成事業

2-1　持続可能な農業・農村開発コース　運営支援および研修所の環境向上

- **持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）の再開**

7 月 3 日、インド各地に散在する少数民族出身者 5 名、ミャンマーの少数民族 2 名、日本の農業高校専攻科を卒業した青年 1 名、総計 8 名が上記のコースに入学した。極度の貧血症で、研修継続が困難と判定された北東インド出身の学生 1 名を除いて、3 月 22 日、7 名が無事卒業できた。

3 月 22 日。SCSAD の卒業式

コース修了前に行った評価会では、異文化環境での研修は技術や知識のみならず、多様な社会環境、共存についての学びが大きかったことを示唆する研修者からの声を聞くことができた。卒業生は現在、それぞれの属する村や団体で活躍している。青年農村リーダー研修のために、特別指定寄付をしてくださった方々、そしてクラウドファンドを通して多大なご寄付やご支援をくださった方々に感謝する。

2-2　僻地農村学校の自立運営に向けた総合的教育支援事業

- アーシャ学校マエダ校の支援を継続し、主に、奨学金の提供を行った。幼稚園クラスから小学校 5 年まで、平均約 40 名の児童に奨学金の供与を行った。今年度は、資金と人員不足のため、児童のための教育的プログラムを実施することはできなかった。

9 月 13 日。アーシャスクールマエダ校の
子どもたちと SCSAD 学生の交流

2-3　裁縫学校の運営支援、裁縫によるフェアトレード製品の開発支援

- 農村女性の収入向上のための事業として、マエダ村とハルディ村にある農村改善センターで行われる基礎裁縫クラス(2 か月間)の研修を予定したが、資金の確保ができなかったこと、また、インドと日本からの縫製製品の注文が増えたことで実施できなかった。
- 今年度は、日本のデザイン及び縫製の専門家、現地大学家政学部の教員の協力、支援が得られ、日本やインド・デリーの販売店との協働で商品開発を行うことができた。その結果、前年度に比べ、経済的な自立に向かって　活動することができた。現在、7 名の農村女性がこの事業に積極的に参加している。

日本から 100 枚単位でのオーダーバッグの依頼を受けるようになった

2-4　農村保健衛生改善支援事業

- 2023 年 12 月、有機農業組合（AOAC）で製造されたモリンガ乾燥粉末の一部を村の子どもたちに配布し、モリンガと豆腐の料理方法のデモンストレーションを育成された元農村保健ボランティアの協力によって実施した。モリンガ粉の摂取を促進すると同時に、子どもたちの栄養改善のための啓発活動を行った。
- AOAC が製造する豆腐を栄養改善食品として普及するために、プラヤグラージ市街地での直接販売や村の冠婚葬祭時に販売促進ができるように支援協力した。

村落での豆腐とモリンガの普及と料理デモンストレーション

2-5．農村女性所得創出・地位向上支援事業

- 2022 年 3 月下旬に JICA 事業として採択されている大豆関連事業を本年度開始できる体制をとっていたが、インド政府からの承認が得られず、実施に至っていない。JICA インド及び JICA つくば事務所が承認取り付けに尽力してくれているが、未だにその道筋が開けていないのが現状である。

3．事業を推進するための調査研究、及び啓発・広報事業

3-1　ワークキャンプ・スタディツアー開催、訪問者受入

- **インターンシップ・プログラム、スタディツアーの再開**

一般向けのスタディツアー（1 週間）と学生向けのインターンシップ・プログラム（2 週間）を同時開催した。スタディツアーを 2024 年 3 月 3 日より 12 日まで、インターンシップ・プログラムは 3 月 3 日から 18 日までであった。

最初の一週間は同じプログラムで行い、その後インターンシップ・プログラム独自の研修を実施した。参加者は日本人大学生４名、モンゴル人大学生１名、アーシャ理事１名、一般２名（１週間のみ）、合計８名であった。
多様性際立つインドという環境で、マキノスクールのスタッフや学生と一緒にグループに分かれて立案、協働で行う活動、SCSAD 学生との各国料理交流会、プラヤグラージのサンガム、バナラシ観光等もプログラムに組み込んだため、濃密なスケジュールとなったが参加者から良い学びとなったとの評価を得ることができ、「来年度も是非継続して欲しい」という要望が出された。

SCSAD 学生と一緒にビスケット商品開発をするインターシップ・プログラム参加者

３-２　会報の発行

- アーシャのインド及び日本での活動の内容を会員、支援者に理解していただくために、年３回（5 月、9 月、12 月）会報を発行した。

３-３　広報活動の拡充

- ホームページ、Facebook、Instagram 等による広報活動の拡充を図り、当会の活動をより広く知ってもらい、当会の認知度向上、会員数と寄付の増強に努力した。
- SCSAD 再開のために 2023 年３月開始したクラウドファンディング（Campfire）は目標額には及ばなかったが、指定寄付として奨学金が寄せられ、無事にコースを再開できた。
- 企業の CSR 活動へのアプローチは本部の人員不足もあり、積極的に行われなかった。
一方で、公益財団法人 社会貢献支援財団の事務局推薦を受け、2024 年７月 29 日に表彰されることになった。

３-４　日本国内における学生・市民のためのセミナー及び講演の企画、主催、参加

- ８月、栃木県国際交流協会グローバルセミナーでは、前半、参加者と現地とをオンラインでつなぐ参加型のセミナーとした。
- 12 月、栃木市マロニエ医療福祉専門学校、看護学科・助産科にて、「国際看護学」「国際助産学」の中でアーシャの活動を紹介した。三浦代表理事が担当した。

３-３　次期事業形成調査

- U.K.州での JICA 事業開始のために、現地統括事業責任者三浦が 2 回カウンターパートである MGVS を訪問し、インド政府からの事業開始承認について早急に行えるよう、JICA インドの職員と共に、州政府の関係局を訪問し、働きかけを行った。

4．災害や紛争などによる被災住民への緊急支援事業

今年度インドにおいて新型コロナ感染の顕著な拡大、また新たに災害や紛争などが認められなかったため、緊急支援事業は実施されなかった。

Ⅱ．その他の事業

1．バザー・チャリティ・販売事業

- 特定非営利活動を持続的に発展させる自立した基盤を構築するために、インド国内および日本において販売活動を強化、拡充した。インドにおいては日本人が経営する店舗（Happy Hunter、HASORA など）が AVS 制作の商品を販売してくれるようになった、インド及び日本で商品の共同開発が進むことで、積極的に商品を販売してくれるようになった。
- インド国内では、地元の大学キャンパスでオーダーメイドバッグの注文が増えた。また、デリーの常設販売、委託販売の促進を支援した。地元 NGO 主催のバザールの協賛出店を行った。販売促進のため、デリーやその近郊で開催される祭りやイベントに参加し、出店販売を行うとともに、当会の活動の認知度向上に努めた。
- 日本では、東京、千葉、岐阜、島根、栃木に取引店舗があり、ハンディクラフトは売上増、モリンガについては、コロナ禍での免疫力アップ意識が薄れたのか、やや苦戦している。継続的に栃木県内での出店販売、ASHA STORE でのオンライン販売を促進した。出店販売ではアーシャの活動を紹介すると同時にモリンガ茶の試飲や夏季にはモリンガ苗を販売し、モリンガの認知度を上げる努力を重ねている。AVS 商品では、那須高原の（株）フィンランドの森のヨガ教室と共同開発したヨガパンツがよく動き、定番商品の 1 つとなってきた。また、オーダーメイドバッグも岐阜の山のハム工房ゴーバル、世田谷下北沢の三叉灯から定期的に注文が入り、定番商品となっていることは感謝である。

2．食品加工事業

- 国内事務所ではモリンガ関連商品の販売活動を拡充するため、インドからモリンガ粉末とヒマラヤ岩塩の供給を受け、モリンガパウダー、モリンガ塩など、販売形態に合わせたブレンド、リパック、ラベリングなど加工事業を行った。

3．演奏会、展示会、図書出版等の文化事業

昨年度同様に、農村開発や人材育成の支援活動の写真などを整理し、栃木県国際交流協会のグローバルセミナー会場や栃木県大田原市にあるヒカリノカフェ蜂巣小珈琲店にて写真展、パネル展示をした。同時に AVS 商品やモリンガ販売を行った。これらの活動を通してインドの農村事情・食文化や国際協力の必要性・あり方、本会の活動を伝えた。

Ⅳ．事業の実施に関する事項

（１）特定非営利活動に係る事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者数	受益対象者の範囲及び人数	事業費の金額(千円)
1.農村開発・農業開発支援事業	持続可能な農業・農村開発・収入向上事業	通年	インド･プラヤグラージ地区	3 名	農村住民 30 万人	1,342
2.人材育成支援事業	①持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）運営支援および研修所の環境向上	通年	インド・プラヤグラージ地区	3 名	研修生 7 名、農村住民 1000 人	2,720
	②僻地農村学校の自立運営に向けた総合的教育支援事業	通年	インド・プラヤグラージ地区	2 名	農村児童 100 人	15
	③裁縫学校の運営支援、裁縫によるフェアトレード製品の開発支援	通年	インド・プラヤグラージ地区	3 名	農村女性 1000 人	3
	④農村保健衛生・健康栄養改善支援事業	通年	インド・プラヤグラージ地区	6 名	農村住民 30 万人	0
	⑤農村女性所得創出・地位向上支援事業	通年	インド・プラヤグラージ地区、ウッタラカンド州	10 名	農村住民 30 万人	28
3.事業を推進するための調査研究及び啓発・広報事業	①インターンシップ研修及びスタディツアー・訪問者受入	年 2 回	インド	7 名	日本、インド 20 人	718
	②会報の発行・広報・セミナー	年 3 回	日本、インド	7 名	日本、インド 1000 人	94
	③次期事業形成調査	随時	日本、インド	2 名	日本、インド 20 人	48
4.災害や紛争などによる被災住民への緊急支援事業	緊急支援活動事業	実施なし	実施なし	0 名	－	0
						4,958

（2）その他の事業

事　業　名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者数	受益対象者の範囲及び人数	事業費の金額(千円)
1.バザー・チャリティ・販売事業	バザー出店販売、収入向上支援・調査、販売、新製品開発	通年	日本、インド	7 名	日本、インド 1000 人	1,268
2.食品加工事業	モリンガ粉末等の加工	随時	日本	2 名	日本 1000 人	1
3.演奏会、展示会、図書出版等の文化事業	絵画・写真展	随時	日本	4 名	日本 200 人	7
						1,275